

『誰かに優しさを届けるように』

足立区立栗島中学校 二年一組

長根 琴羽

「今から救急車に乗るから、保険証と医療証を持って来て」。今年、六月下旬の土曜日。母からの電話に「救急車って?!」と私は驚きを隠せなかった。

私の弟は、サッカーチームに所属している。その日も弟は、家からほど近い学校のグラウンドでサッカーの試合をしていた。試合も終盤。浮き球を相手チームの選手とヘディングでせり合った弟の顔面に、相手選手の頭が激突し、弟はピッチに倒れた。電話を受けた私は、保険証と医療証を持つとすぐ、母と弟の元へ向かった。私が着くとすぐ、遠く響くサイレンがだんだん近くなり、弟は救急隊員にストレッチャーに乗せられると、救急車で大学病院に運ばれていった。

七百二十二万九千八百三十八。これは、令和四年中の救急自動車の出動件数だ。前年比十六・七パーセント増で過去最多。日本の高齢化や環境変化による気温上昇により夏の熱中症に対する救急要請は、ますます増えているのが現状だ。

救急車は、日本では日本にいる誰でも無料で利用できる。私は、そのしくみが気になって調べてみると、私たち国民が納めている税金で賄われていると知った。救急車の維持、出動には、年間二兆円もの税金が使われていて、税金を使って救急車の購入やメンテナンス、ガソリン代、救急車にのせる医療機器や物品の購入な

どを賄っている。救急車は、出勤一回あたり、およそ四万五千円という高額な費用がかかっていると知って、とても驚いた。

私にとって税金は払うものという意識だった。買い物に行けば消費税を取られるし、大人は所得税など色いろな税金を納めている。しかし、救急車が税金で賄われていると知って、その考え方が変わった。他にも、私たちの暮らしの中で税金はさまざまなことに、使われている。

救急車で病院に運ばれた弟は、いくつもの検査をして手術をすることになり入院した。そうしてかかった病院の費用のほとんども、私が母に届けた保険証と医療証を窓口に出すことで、その場で支払うことなく、税金で賄われている。こうした社会保障制度のおかげで、私たちは安心して毎日暮らせるのだと実感した。弟も幸い全快した。

母はよく「どんな時でも誰にでも人に優しく」と私たち兄弟に言う。優しさは、巡り巡っていつか自分に返ってくるからと。私は税金も優しさと同じだと思った。私が納めた税金が、誰かの役に立っていると思うと消費税を払うのもちよつと嬉しい気持ちになる。税金が、私たちの安心した豊かな暮らしを支えてくれているということ。誰かに優しさを届けるように、納税する。そんな考え方が、もつと広がってほしい。